

ゆう いち はたけ 友一と畑

「うわあ、すごいぞ！」まだ育ち始めたばかりの明るいオレンジ色のカボチャをポンポンとたたきながら、友一が言いました。昨夜から、もう二回りほども大きくなっているようです。「おまえも、兄ちゃんカボチャ達みたいに大きなカボチャになれるよ。」

お母さんが作ってくれるいろいろなカボチャ料理を思いつかべて、友一はにっこりとほほえみました。カボチャの甘辛煮、カボチャの天ぷら、カボチャの入った汁物・・・。友一は、カボチャが大好きです！

友一はそこに立って、のびをしました。今朝はとても幸せな気分です。畠では、たくさんの野菜がよく育っていました。真っ赤なトマト、青々としげったほうれん草、カボチャ、サツマイモ、ナス、ジャガイモ、それににんじん・・・。みんな、友一がお父さんを手伝って、いっしょに植えた野菜ばかりです。畠のすみには美しい梅の木が立っていて、みきは生いしげった葉のかけで黒く見えます。背の低い柿の木には、小さな柿の実がつき始めました。うれて食べられるようになるには、まだだいぶ時間がかかるでしょう。

畠を見回してみると、ナスの周りに雑草が生え始めています。「雑草は、小さいうちにぬいておかないと。」友一は、お父さんが雑草についていつも言っていた教訓をくり返しました。「雑草は、そのまま放っておくと、野菜が大きく栄養たっぷりに育つのに必要な養分を、土からうばってしまうから！」

友一は、畠の野菜を世話するのが楽しみでした。野菜の種は、いったん水をたっぷり吸った地面の中にもぐりこんだかと思うと、やがて芽が土をおし上げて顔を出します。そんな様子を見るのが、友一は大好きでした。畠仕事の中でも、友一が特に好きなのは、収穫です。家族総出でトマトをもぎ、野菜を取り入れて、大きなかごに集めるのです。ジャガイモは、くわで掘り起こします。それはまるで宝探しのようだと、友一は思います。地面の下で育ったジャガイモを、一つ残らず見つけ出さなくてはならないからです。



腰をかがめてナスの周りに生えてきた
雜草をぬき始めると、だれかが友一を
よ呼ぶ声がします。目をあげると、友だちの
拓が木刀をかざしながら、こちらへ
走って来ます。拓は、侍の子です。

「見て！」興奮した声で拓がさけび
ました。「わしの刀なんだ！」

友一は、拓の新しいおもちゃを
しげしげと見つめました。「すげえなあ！
わしにも、そんなんがあつたらいい
なあ。」

拓は笑って、うれしそうに飛びはね
ました。「そうじゃろう、そうじゃろう！
なあ、いつしょに遊ぼうや。」

友一は、今まで草取りをしていた
ナスの畠をふり返りました。ナスは
もはや、ついさっきまでのように興味
深くは見えません。「最初にこれを
終わらせにやいけないんだ。ちゃんと
世話をせんと、ナスが苦しむからね。」

拓は敵と戦っているふりをして、
木刀をふり回し始めました。「そんな
こと、だれにもわからんよ。それに、一体
どうしてそんなことしてるの？おまえの
母さんにだって、簡単にできるだろ。」

「わしは、畠仕事が好きなんじゃ。」と
友一が答えました。でも、どのくらい
好きなのか、自分でもだんだんと
気持ちがゆらぎ始めました。



「だが、本当に今、畠仕事をしたい気分なんか？」

「ああ・・・そうだとおもと思つたんやけど・・・。やっぱり今は、遊びたい気分や。もう少ししたら、また畠仕事をする気分になるだろう。そうしたら、その時に雑草を始末するわ。」

友一と拓は、村の近くの川の浅いところで、日中の大半を過ごしました。松の丘に登って両うでを広げ、空高くまい上がるタ力のまねをして遊びました。そこで中には、拾い集めたピカピカの石をいっぱい入れて、戦のまねごとをして遊びました。木刀を持っていたのは拓だけだったので、毎回戦ごっこに勝つのは、拓でした。

「今日は、どうだったかい？」 シャケとたくわんとご飯とみそ汁の夕食を囲みながら、お父さんがたずねました。

「拓と遊んだよ。」 そう答えながら、友一は急に、それが丸1日を過ごす最善の方法ではなかったのではないかと感じ始めました。

「楽しかったか。」 みそ汁をすすりながら、お父さんが言いました。「恵まれたすばらしい夏の日々は、本当に大切だからう。」

しばらくすると、お父さんが気がかりそうに言いました。「今日、ナスの畑に雑草が生えておったが。おまえはふだんから十分気い使って、雑草が生えないように見てくれとるが、今日は気いつかんかったようだね。」

「父さん。雑草は見たんだけど、今朝は畠仕事をする気分でなくて。」と友一が答みました。

「おまえは去年、母さんを実によく手伝ってくれた。それで、今年はおまえに畠を任せることにしたんじゃ。畠のおかげで、わしらは漬物やら梅干しやら干し柿を、冬の間でも食べることができるんじゃぞ。」

「分かってるよ。」 友一は弱々しい声で言いました。

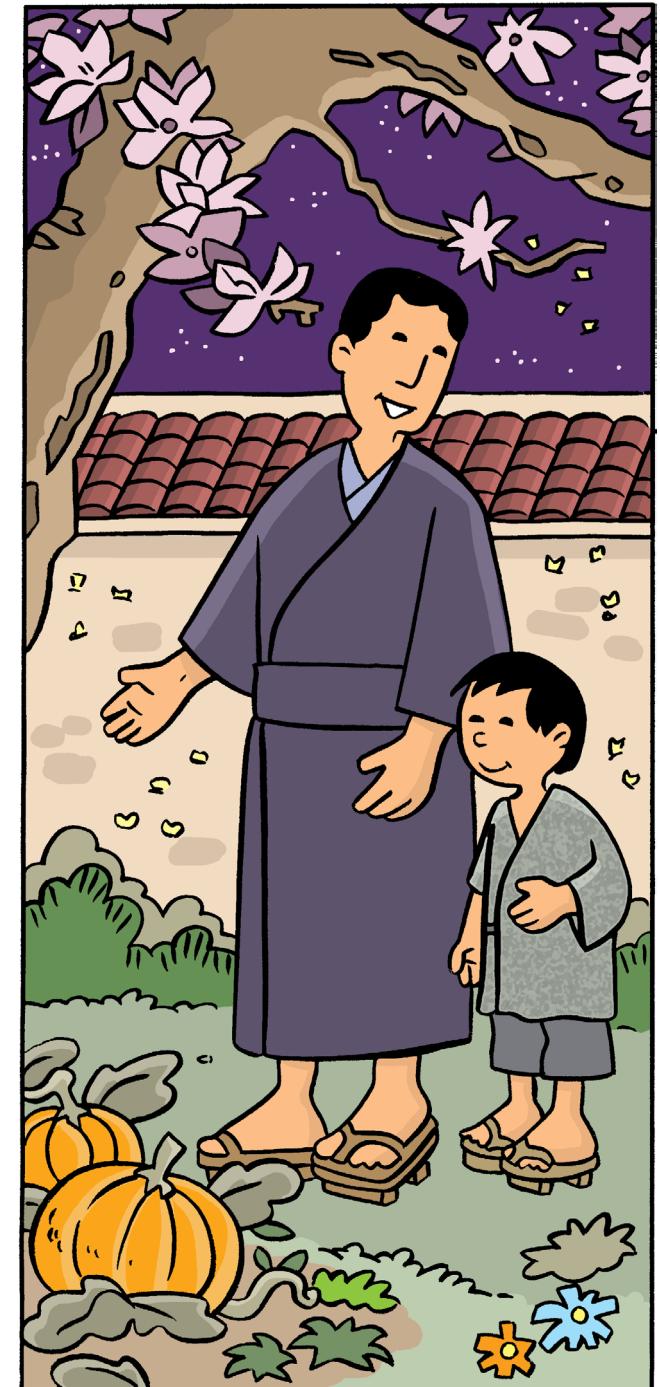
お父さんは、友一の肩に腕を回しました。お父さんの目は輝いています。「飯がすんだら、おまえに見せてえもんがある。」

その夜、友一とお父さんは畠のすみに立ちました。周りではホタルがピカピカ光り、他の虫たちも飛び交っています。

「これは何だとと思うか？」 そう言いながら、お父さんは浴衣のそでから、色がうすくて平べったい種を一つ出して、友一の手ににぎらせました。

「カボチャの種。いつか、これはカボチャになるんだね。」と友一が答みました。

「本当か？ じゃあ、この種をこの地面に置いておけば、5か月後にもどってきた時に、ここにカボチャがあるってことだな？」



「いいや、父さん。もし このまま ここに 置いとつたら、鳥に 食われるか、風で どっかに 吹き飛ばされてしまうよ。ちゃんと 植えないとな。」

「では、ここに 植えれば、その後は そのままにしておいて いいんだね？」

友一は 笑って 言いました。「もちろん、だめさ！ 種には 水を やらないといけんし、肥料も 必要だもの。それに、虫が 来て 葉っぱを 食わないようにしないといけんし、雑草も 生ないように しないといけないからね。」

「そうかあ、大変な 仕事だなあ！」 お父さんが ほほえみながら 言いました。「じゃあ、来年は カボチャの 種 植えるのは、やめに しよか？」

「カボチャの 種を 植えないの？」 友一が 声高に 聞き返しました。

「それから、ナスの 種も、トマトの 種も。種は 何も 植えないことにするんじや！ 世話するのが 大変だろ？ おまえには 楽しんで もらいたいからのう。」

「だけど、冬の 間は 何 食べるの？」

「そうだなあ。そのころに 野菜を 植えるかのう？」

「それじゃあ、間に 合わんよ！ おてんとさんが 十分に 照らんし、何を 育てるにも 寒すぎるもの。」

「だが、おまえは 畑を やるより、野原で 拓と 遊んでいたいと思わんのかい？」

友一は だまつてしましました。その日、ただ 明かりがってばかりいたら どうなつてしまふのか、将来のことまで 考えられていたならなあ、と 思いました。

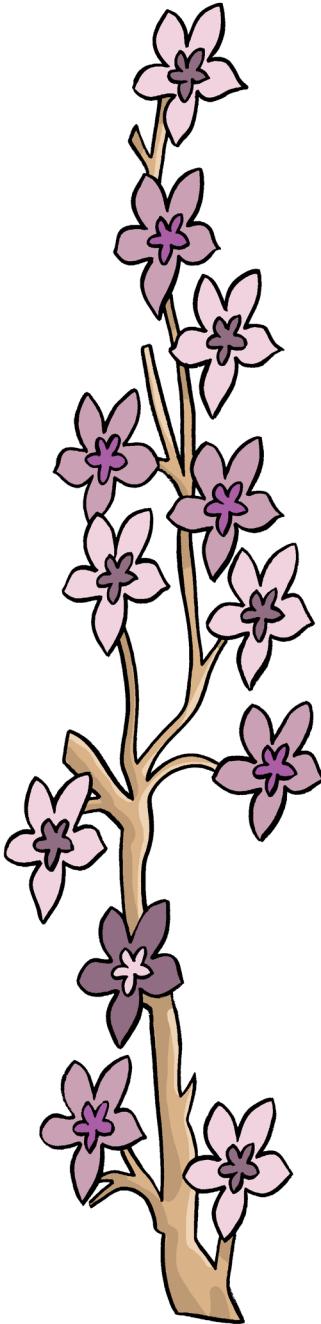
お父さんは 友一のかたに うでを 回しました。二人は、家の前にかけられた ちょうちんの 明かりに 照らし出された、まっすぐに並んでいる トマトや ナスや ほうれん草や にんじんや ジャガイモやカボチャの 列を、じっと 見つめていました。

「わしらが 気分の 向くことだけを するのは、一時の 楽しみのことしか 頭に ないからじや。だが、そういったことは ふつう、暗くなつてしまつたら おしまいじや。」

わしも、つかれて 魚を 取る あみを 下ろす 気が せん ことも あるが、おまえや 母さんの ことを考えると、喜んで そう したくなるんじや。それで 家族が ちゃんと 世話され、おまえも 幸せになれると 知つるからね。」

翌朝、昨夜の お父さんとの 会話で 決心の ついた 友一は、さつと 下駄を はくと、いそいそと 畑に出て 行きました。





「今日は、おまえさん達の周りに生えとる悪い雑草を、一つ残らずぬいてやるからな。」 友一はナスに話しかけました。畠仕事をする喜びがもどってきたのです。ナスは、ただのナスではなく、これらの野菜全部が、1年中おいしい食べ物を食べることができるという、大切な意味を持っていました。

「おい、友一。」 聞きなれた声がします。「また遊びに来たよ！」

「悪いんだけど・・・」と友一。「今日は、午後まで遊べないんだ。まず、畠の雑草を始末せんといけないからね。」 友一は愛想よく、しかしきっぱりと言いました。

拓は、友一のまじめそうな話し方にびっくり。一体どうなっちゃったんだろうと、頭をかしげていました。そして、そこに腰を下ろすと、聞きました。

「1日中遊んでいたいのに・・・かい？」

「そうだねえ、もしわしが野菜の世話をしなかったらどうなるかを考えてみるとね、やっぱり、今は野菜の世話をして、遊ぶのはその後じゃ。」

「それじゃ、ちっとも面白くないじゃないかい！」 拓はむつりした顔で言いました。

「そのことなんだけれどね。」 友一がほほえみながら言いました。「おまえに言われてよく考えてみたら、やっぱり畠仕事は楽しいわ。ナスが大きくなつてうれるとね、丸々と太つてピカピカの紫色になるんだよ。すると、母さんがナスを焼いてくれる。ものすごくうまいんだ！ 母さんも喜んでくれるし、父さんも誇りにおもってくれる。わしもそれがうれしいんだ。

おまえは大きくなつたら、お父上みたいにお侍さんになりたいのかい？」 今度は友一のほうが拓にたずねました。

「分からん。わしは、遊びたい気分の時は、遊ぶ。トンボをつかまえたりなんかしてな。それから、ただねどこにねつ転がって何もしないのも、すごく気持ちいいよ。先のことなんか、考えないさ。」

「ふう～ん。あのな、それはわしのカボチャみたいなものさ。もしわしがちゃんと世話しないなら、カボチャは虫に食われたりする。カボチャがじょうぶで大きくなるためには、わしが自分の役割を果たさないといけないんだ。わしは、大きくなつたら、今ここにあるだけじゃなくて、もっとたくさんの野菜を育てたい。だから、今できることをして学ばんといけないんだ。大きくなつたら、いいお百姓になれるようね。」



かんが すえ たく
ちょっと 考えた末、拓が おずおずと たずね
ました。「わしも 父上のように りっぱな 侍に
なれると 思うか？」

おも おも ほくとう
「ああ、思うよ。おまえは 木刀さばきが
じょうず 上手だしね。だが、修行は 必要だろう？」

たく とくい は
拓は 得意そうに むねを 張りました。それから、
ため息を ついて 言いました。「だが、わしは
なに 何を したら いいんだろう？」

あそ 「遊びほうけてばかりは おられんだろう。だが、
こつこつと がんばりやあ、いつかは りっぱな
お侍さんになれる。わしが 番を きちんと 世話して
いれば、将来 りっぱな お百姓になって、たくさん
野菜を 育てられるようになるのと同じにね。」

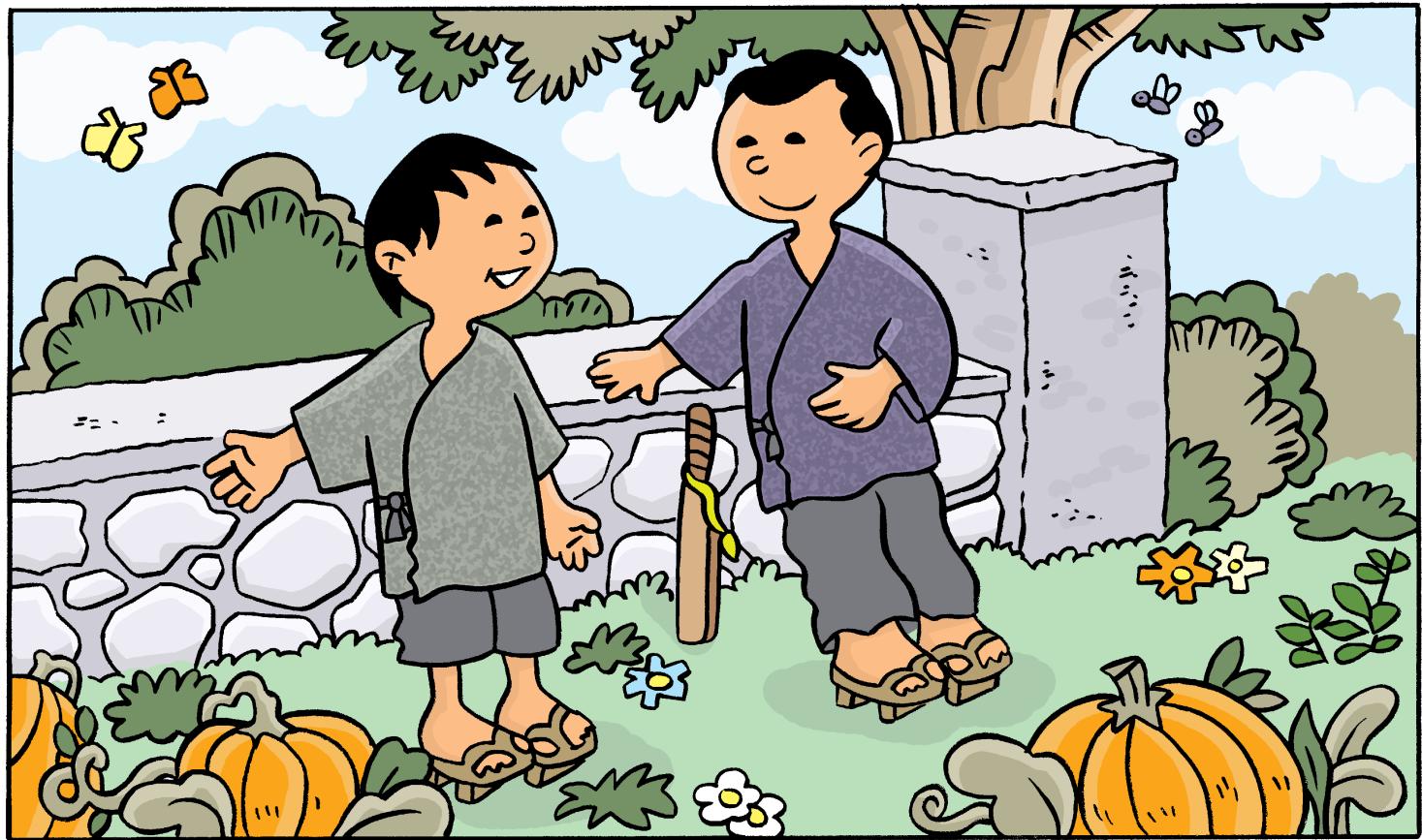
たく ゆういち ざつそう つづ
拓は、友一が 雑草を ぬき続けるのを じっと
見つめていました。「なあ。わ、わしの 木刀を、
はたけしごと つか 使ってみないか？」 拓が たずねました。

ゆういち ことわ たく
友一が 断ろうとすると、拓が すばやく
つけ加えて 言いました。「これを シャベルか
すき代わりに するんだ。いいだろ？」

「そりや いいね！ ありがとうさん！ わしが
ここ 終えたら、遊ぶか？」

あいだ ちちらえ
「うん。じゃあ それまでの 間、わしは 父上の
ところへ 行って、侍になるためには 何を
まな 学んだら いいか、聞いてくるわ。」

たく うし すがた みまち ゆういち たく
拓の 後ろ姿を見守りながら、友一は、拓が よろいを
着て 馬に乗っている りっぱな 侍姿を 想像しました。
それから、自分たちの 番から 収穫される 数々の
やさい おも う 野菜を 思い浮かべて、にっこりしました。



はなし よ
お話を 読みながら
できる アクティビティ：
ゆういち はたけ
「友一と番」
ジオラマ：カラー版、
しろくろばん とりせつ
白黒版、取説



文:T.M. 絵:ディディエ・マーティン
デザイン:ロイ・エバンス
出版:マイ・ワンダー・スタジオ
Copyright © 2020年、ファミリーアンターナショナル
"Yuichi's Garden"--Japanese
関連の読み物はこちら ⇒ 子供のための物語、
ねばり強さ、責任、自己鍛錬